

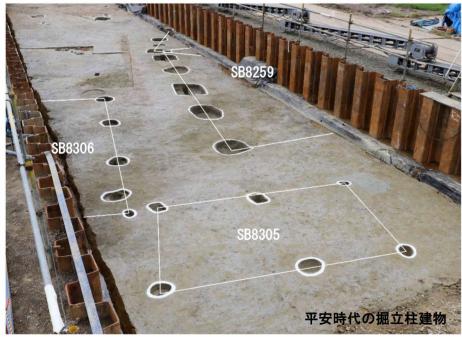


地面に穴を掘って、須恵器の大きな甕(かめ)を設置 した遺構が見つかりました。水や何らかの液体を貯蔵 した施設と見られます。

(2) 平安時代

平安時代の掘立柱建物7棟を検出しました。いずれも東西南北軸にあわせて整然と建てられています。中でも掘 立柱建物 SB8259 は、柱間 4 間(約 9 m)に及ぶ大型の建物です。建物の大部分は調査対象地の外側に広がっており 全貌は不明ですが、建物の規模、柱穴の大きさや形は、ほかの建物とは異質で、本遺跡の中でも中心的な建物であっ たと見られます。また、この建物と平行するように小型の掘立柱建物2棟(SB8305・SB8306)も検出しました。互い の関係は検討中ですが、大型建物の付属施設であった可能性があります。

焼けた米が多量に出土したことも注目されます。中には籾が付いた状態で焼けているものが含まれており、炊飯 時に誤って焼けたものとはいえません。これまでの調査でも焼けた米が多量に出土しており、米を蓄えた倉庫が火 災にあった可能性が考えられます。







籾がついた状態で炭化した米

3. まとめ

下割遺跡では、洪水堆積物をはさみ、様々な時代の遺跡が重なっていることが明らかになりました。その年代幅 は、周辺のほかの遺跡より長く、かつ多様な時代の生活痕跡が確認されています。このことは、本遺跡に繰り返し 人々がやってきて、様々な営みを展開したことを示しています。

かつて高田平野には、大きく蛇行する川と多くの潟湖が存在しました。人々はこれを交通網とし、舟を使って行 き交っていたようです。「舟運」の存在は、下割遺跡が築かれた重要な背景であったと考えられます。

しもわり 上越市 下割遺跡(X)現地説明会資料

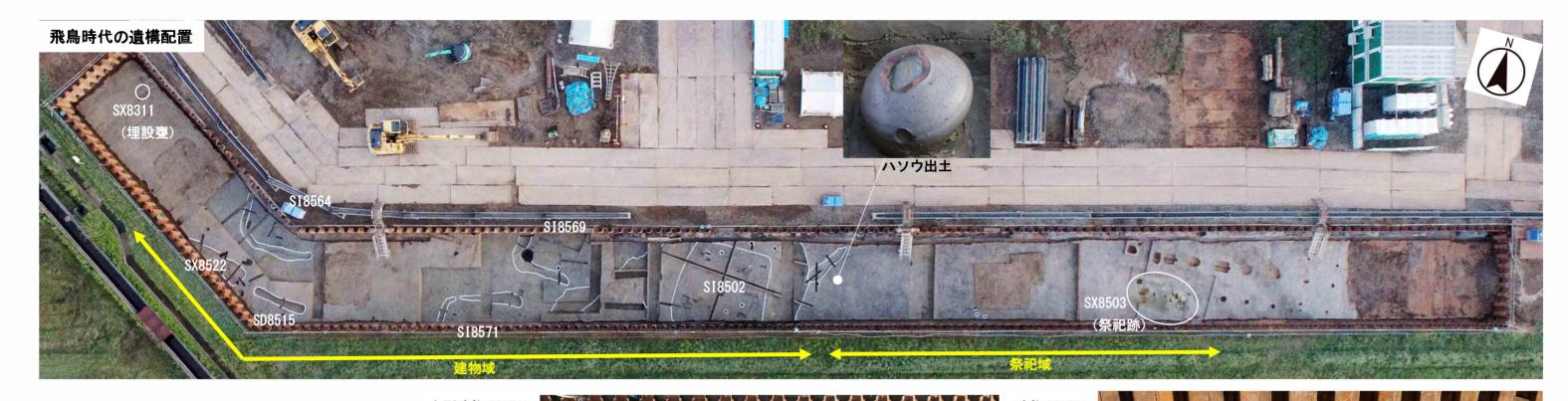
令和4年10月22日(土) 国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所 公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

1. 遺跡の立地

下割遺跡は、高田平野のほぼ中央、飯田川左岸の沖積地に立地し、現地表面の標高は約 14mです。東西 950m、 南北 750mにも及ぶ広大な遺跡で、上越三和道路建設に伴い、これまでに 10 回にわたって発掘調査を行ってきまし た。その結果、地下およそ4mにも及ぶ地層の中に中世(約500~600年前)、平安時代(約1,200年前)、飛鳥時代 (約1,400年前)、古墳時代(約1,500年前)、縄文時代後期(約4,000年前)の遺跡が重なっていることが明らか になっています。中でも地下4mに埋没している縄文時代後期の遺跡は、高田平野の成り立ちを考えるうえで重要 な資料といえます。







2. 調査の概要

今年度の発掘調査では、中世(約500~600年前)の水田、平安時代(約1,200年前)の建物・畑、飛鳥時代(約1,400年前)の建物・祭祀跡が発見されており、現在は縄文時代後期(約4,000年前)の遺跡の調査を行っています。今回の調査で最も注目されるのは、県内でも調査事例が少ない飛鳥時代の遺跡です。洪水堆積物に覆われていたため、遺構が良好な状態で発見されました。

(1) 飛鳥時代

【建物】

建物4棟を発見しました。いずれも平地建物と見られますが、建物構造については検討中です。いずれも溝に囲まれていることが特徴的で、溝 SD8515・SX8522 も、建物の周囲をめぐる溝の一部と見られます。溝は、内と外を区分する境であるととともに、床面を乾かすための対策として掘られたようです。

SI8502 は、溝の外径が 13mを超える大型の建物で、集落の中心的な建物であったと見られます。この建物の床は、厚く粘土を貼った土間がつくられていることが特徴的ですが、地下水位が高いためにとられた湿気対策と見られます。

SI8564・SI8569・SI8571 は、いずれも東側で溝が途切れていますが、ここが建物の出入口であったと考えられます。東側に出入口を設置したのは、 冬に吹き荒れる北西からの季節風への対策であったかもしれません。

また、SI8564・SI8569 では明瞭な炉が築かれており、SI8502 ではカマドの痕跡が認められます。それらの周囲には、炊飯に使われた鍋や甑(こしき)が出土しており、建物内に炊事場が設けられたと考えられます。

これらの遺構から出土した遺物の年代に大きな差はありませんが、発見された地層が異なり、SI8571→SI8502・SI8564・SI8569→SD8515・SX8522の順に建てられたことが分かりました。それぞれの地層の間には洪水堆積物が認められます。洪水災害にあいながらも、集落を復興した様子を読み取ることができました。

【祭祀跡】

建物域の東側では、祭祀が行われたと見られるエリアが発見されました。SX8503 では、土器が並べられた状態で出土しており、いずれも同じ方向に倒れていました。ここからは須恵器の高杯・杯、土師器の高杯・杯・甕、手づくね土器に加えて、土師器の杯と一緒に臼玉2点が出土しました。手づくね土器や臼玉は、しばしば祭祀遺構から出土する遺物で、出土状況も踏まえると祭祀の跡と考えられます。このような祭祀は、古墳時代に多く見られますが、飛鳥時代の事例はあまり知られていません。前の時代の祭祀のかたちが、飛鳥時代まで引き継がれた様子が明らかになりました。

